

ちばオピニオン

南房総の「エコミュージアム」

地域全体を博物館に見立てて、魅力的な自然遺産や文化遺産を再発見するとともに、市民の主体的な学習・研究・展示・保全などの活動を通じて活性化を図るまちづくり手法を「エコミュージアム」という。最も重要なことは、住民が自ら地域課題をよく理解し、暮らしやすい地域の将来像を描くことだといわれる。

地図を逆さまに見ると、房総半島南部の安房地域は、弧を描いた日本列島の頂点に位置している。地政学上、重要な

私論 直言

軍事拠点であるとともに、広く海洋世界と交流し共生した地であった。繰り返し起きる地震津波や遭難、戦乱などを乗り越え、助け合い、支え合って生きてきた先人たちの姿を学ぶことができる。

世界史教師であった私は、足元の地域教材を生かして、地域と自己を見つめ直し、世界を俯瞰(ふかん)するグローバルな視野を育む教育を試みてきた。生徒が主役の授業づくりは、やがて市民が主役の生涯学習まちづくりに発展した。

人々の記憶から消された歴史は多いが、30年にわたる市民の保存運動により、戦争遺

NPO法人
「安房文化遺産フォーラム」代表

愛沢 伸雄氏



代表となり、53歳で退職。その後、千葉大学教育学部非常勤講師(4年在職・社会科教育論)。千葉県歴史教育者協議会委員。館山市観光協会常務理事。

◇あいざわ・のぶお 1951年、北海道下川町出身。早稲田大学卒。千葉県立高等学校教諭(安房地区4校25年在職・社会科世界史担当)。2004年にNPOを設立して代表となり、53歳で退職。その後、千葉大学教育学部非常勤講師(4年在職・社会科教育論)。千葉県歴史教育者協議会委員。館山市観光協会常務理事。

跡群や里見氏城跡群、青木繁「海の幸」誕生の小谷家住宅をはじめ小高記念館や小原家住宅などの建物を、国や市の指定・登録文化財とすることに成果を上げてきた。

「館山まるごと博物館」活動を通じて、市民らは自分たちが暮らす地域への誇りをよみがえらせ、まちづくりへのエネルギーを呼び起こしている。

NPO活動の主たる事業は、スタディーツアーガイドである。赤山地下壕(ごう)跡の入壕者は、東日本大震災の影響により一時激減したが、「戦後70年」の取り組みがメディアに広く紹介されたことを機に、年間3万人を超えるようになった。

NPO設立当初は平和学習ツアーが大半だったが、現在はエコミュージアムまちづくり視察の来訪者が、国内外から増えている。「館山まるごと博物館」の事例は行政主導ではなく、市民の主体的活動であることが注目されている。

という。また、全国的美術家などとネットワークを図って、小谷家住宅の修復基金を創出し、青木繁「海の幸」記念館を昨春開館した。細々とした民間運営のため、開館日は土日のみ(平日は団体予約可)だが、来館者は年間3千人を超えた。

この活動では、ノーベル賞の大村智先生が理事長であるNPO法人青木繁「海の幸」会、青木繁の故郷・福岡県久留米市の青木繁旧居保存会、作品を所蔵する石橋財団をはじめ、多くの団体やゆかりの自治体との連携による成果が評価され、千葉県知事から「ちばコラボ大賞」が授与された。洋画で最初の重要文化財となった青木繁「海の幸」はパリで展覧会が開かれ、国際的な評価が高まっている。東京八重洲のブリヂストン美術館は、海外からの誘客を図るため、東京オリンピック前にリニューアルオープンする予定で建て直しを進めている。

千葉県がかつて「NPO立県」を標榜(ひょうぼう)していた2004年に法人を設立して13年になる。多様な公益活動の成果を上げているものの、現実には人件費も困難な状況が続き、ソーシャル・ビジネスの展開を模索している。

若者が地元に残るような魅力的な地域づくりを進め、高齢者の年金プラス5万円の収入につながっていく仕事づくりのためにも、県や市をはじめ多様な主体との協働をさらに図り、次のステップに進んでいきたいと願っている。

地域市民、誇り持ち活動